

吉田健一年譜追考

*1) 島内裕子

要旨

本稿は、従来あまり知られていない吉田健一の翻訳や初出誌など、管見に入ったものを紹介しながら、主として、昭和二〇年代から四〇年代までの彼の文学活動を概観する。

特に昭和二四年六月から昭和三五年八月まで、中断を挟みながらも通巻四八号にわたって刊行された『あるびよん』は、当時の吉田健一にとって、作品発表の舞台の一つとなった雑誌であり、そこに寄稿した評論やエッセイなどは、後にいくつかの単行本に再録されて、彼の英文学論を形成するものとなっている。また、『あるびよん』に掲載された座談会や鼎談などは、その性格上、彼の著作には直接入らないが、ここでの発言は彼の文学観や人間観を知るうえで重要なものであるし、その後の単行本にも収められなかったごく短いエッセイなどもある。現在最も詳細な集英社版『吉田健一著作集』全三〇巻補巻二巻は、補巻を除いて、単行本として刊行されたものに限り収録しているが、これらの小エッセイは見逃されがちであり、年譜などに記載されていないものもある。また、現代においては、吉田健一と言えば評論家というイメージが強いが、翻訳家としての側面も忘れてはならず、その翻訳の中に、年譜類に記載されていないものがあり、さらに、日本の古典の現代語訳の仕事も行っている。

吉田健一の文学世界は実に多彩で多様であるが、その本質を究明するためには、『吉田健一著作集』に収録されていない短いエッセイや、数々の翻訳書なども含めて研究する必要があるし、初出誌と単行本でどのような推敲や改変が行なわれているかを調査することも必要となってくるであろう。本稿では、そのような観点から、吉田健一の文学活動の一端を考察するものである。

はじめに

吉田健一は、明治四五年（一九一二）三月二十七日に生まれ、昭和五二年（一九七七）八月三日に、六五歳で没した。吉田健

一の文学業績は、集英社版『吉田健一著作集』全三〇巻補巻二巻（昭和五三〜五六年刊行）、および新潮社版『吉田健一集成』全八巻別巻一卷（平成五〜六年刊行）によって、ほぼ全貌を知ることができる。また、昭和三三年に刊行された筑摩書房版『現代日本文学全集』を始めとして、いくつかの文学全集にも彼の

*1) 放送大学助教授（人間の探究）

著作が収められている。

『吉田健一著作集』（以下『著作集』と略称する）と『吉田健一集成』（以下『集成』と略称する）には、どちらも詳細な年譜が付いているし、平成二年以降毎年刊行され現在までに一冊のぼる、講談社文芸文庫版の吉田健一の著作にも、解説等とともに年譜が付いている。

これらの年譜類は、吉田健一の生涯や彼の文学活動を一望するうえで有益である。しかしながら、詳細にそれらの年譜を見てゆくと、いくつかの誤りに気付かされるし、出典未詳となっている初出誌などについても特定できるものがある。すでに吉田健一没後二〇年の歳月が過ぎ去っているが、新たに付け加えるべきものは付け加え、訂正すべき誤りは訂正してゆく必要がある。特に、誤った記述がひとたびなされると、その後の年譜類に次々に踏襲されてゆき、事実として定着しがちである。本稿では、主として最も詳しい『著作集』と『集成』の年譜によりながら、管見に入った新事実を付け加え、誤記を訂正し、吉田健一の文学活動を概観したい。

一 吉田健一の翻訳活動

1 『フォーセット探検記』の翻訳

吉田健一の文学活動は非常に幅広いものであるが、初期の活

動分野としては翻訳が多かった。それらの中で、『著作集』や『集成』の年譜に掲載されていないものに、『フォーセット探検記』の翻訳がある。これは、昭和三六年九月一五日発行の筑摩書房『世界ノンフィクション全集』20に収録されているもので、同書には他に、フランシス・パークマン著・刈田元司訳『ラミールへの道』、およびアン・E・プトナム著・水口志計夫訳『ビッグミーとの八年間』が収められ、巻末には泉靖一による解説が付いている。

『フォーセット探検記』は、P・ハリソン・フォーセットの遺稿を息子のブライアン・フォーセットがまとめたものである。「はじめに」の部分の署名にブライアン・フォーセットとあり、その傍らに吉田健一によって、「これはフォーセット少佐の遺稿を編纂したその次男である。」という〔訳注〕が掲げられている。なお、これ以外には訳注は付されていない。

解説によれば、フォーセットは英国の砲兵士官で、一九一〇年前後にペルー・ポリビヤ・ブラジルの三国が国境を接するアマゾンの奥地で国境画定委員会の測量に従事していた。この頃彼は、密林の奥地に今は無人となった古い都市が存在し、財宝が埋もれているという伝説を信じるようになり、何度かの探検を試みた。そして、一九二四年の探検を最後として、彼の行方は不明となったのであるが、それまでに残されていた手記を息子がまとめたものが、この探検記である。

吉田健一が、昭和二九年六月刊行の『文芸春秋臨時増刊 秘録実話読本』に「密林の死の帝国へ！」という題名でフォーセツトの探検の翻訳を発表していることは、『著作集』と『集成』の年譜に記されている。この雑誌掲載の翻訳は未見であるので、『世界ノンフィクション全集』に収められた翻訳と比べてほぼ同一のものか、あるいは抄訳かは不明であるが、七年後にこの『世界ノンフィクション全集』収録の翻訳があることは、ほとんど知られていないと思うので紹介した。

なお、『世界ノンフィクション全集』について言及した箇所が、昭和三七年一〇月刊行の『横道に逸れた文学論』（文芸春秋新社）所収の「読物と文学」に見出だされる。

我々は何にでも名前を付けなければ気がすまなくて、読んでもつまらなくて読物にならない小説が横行した時代に、読める小説に読物といふ名を付けた。そしてこの頃になつて読めるのが小説ばかりではないことが解り、読物と言へば小説のことになるので、小説ではない読物を指すのに今度はノン・フィクションといふ名称を使つてゐる。併しその名称はどうだろうと、我々に読物が提供されれば、それでいいので、例へば今度の「世界ノンフィクション全集」の第一巻に収められてゐるチェリイ・ガラアドの「世界最悪の旅」、ヘディンの「さまよへる湖」、ハイエルダ

ルの「コン・テキキ号探検記」、及び間宮林蔵の「黒龍江紀行」の四篇を取つてみても、読物の世界がどれだけ広いかわくともそのことの一端は覗ける筈である。

この文章の初出は、昭和三五年六月一日付の『読売新聞』である。ここには、吉田健一の文学観がよくあらわれており、「文学」とは、まず第一に読めるものでなくてはならないという、彼の持論が書かれている。また、原文の引用は省略するが、『文学が文学でなくなる時』（集英社・昭和四七年三月）の十章で、フォーセツトが英国に帰国後、再びブラジルに戻つたことに触れている。吉田健一の場合、このように自分が翻訳した作品に関わることを他のエッセイなどで取り上げたり、翻訳作品を創作の中に生かしたりすることは、よく見られる。この点については、拙稿「吉田健一における翻訳と創作」（『放送教育開発センター研究紀要』第二二号・一九九五年）で考察した。

2 ラフォルグの翻訳

吉田健一は、二十代半ばの頃、ラフォルグ論を発表し、その後も何度かラフォルグを論じている。そのような評論にとどまらず、ラフォルグの作品の翻訳もしている。この翻訳について気付いたことを書いておきたい。吉田健一は、昭和二二年一月に角川書店からラフォルグの翻訳『ハムレット異聞』を、昭

和二年六月にはペイターの『ルネッサンス』を同じく角川書店から出版しているが、この間の事情について次のような記述が見られる。

『堀辰雄全集』の別巻一（筑摩書房・昭和五四年）に収められている昭和二年六月五日付の神西清からの堀宛ての手紙（二三〇）には、神西が関わっていた角川書店刊行の「飛鳥新書」の構想が書かれている。それによれば、「目下実現できさうなプラン」として、山内義雄訳のランボオ詩集以下、翻訳書・評論・小説など三七冊が挙げられている。その中に、吉田健一訳のペイター『ルネッサンス』（手紙の表記では「ペエター『ルネッサンス』」）と、ラフォルグ『ハムレット異聞』『サロメ』『パイン』がある。結果的には、これらのうちで『ルネッサンス』だけが「飛鳥新書」となり、ラフォルグの三作品の翻訳は、『ハムレット異聞』というタイトルのもとに一冊にまとめられて、単独で出版された。しかし、神西の手紙によれば、最初の構想では、ラフォルグの翻訳の方も「飛鳥新書」から刊行される予定であったことがわかる。

二 『あるびよん』における吉田健一

1 雑誌『あるびよん』について

昭和二四年六月に新月社から、『あるびよん』という雑誌が創

刊された。創刊号の表紙には、「英文化綜合誌」とあり、その下に編集として、林達夫・吉田健一・福田恆存の三名の名前が挙がっている。巻末の奥付では林達夫が編集者代表になっている。林が執筆している編集後記によれば、この雑誌創刊の経緯は次のようなことであった。

最近、至るところで耳にするのは、一種のイギリス熱の勃興である。（中略）この「イギリス熱」はまだ多く潜熱的でまた散在的であるが、それを正しく組織して、これをわが国精神文化の進展に役立つ新しい一つの動力源とすることが、我々の力強い念願であり、そのやうな意味合から文化団体、「あるびよん・くらぶ」が結成され、その機関誌たる使命を担つて、こゝに「あるびよん」が生まれた。

このような趣旨によつて発刊された『あるびよん』は、途中で何度か中断したり、発行所が変わったりしながら、昭和三五年八月の第四八号まで、通算一〇年以上続いた。最終号の編集者代表は松方三郎、発行所はあるびよん・くらぶ、発売所は大修館書店である。

吉田健一はこの雑誌にかなり多くの評論やエッセイを発表している。順にそれらを概観しながら、彼が『あるびよん』を舞台にどのような文学活動を行なっていたかを見てゆきた

い。その中には従来の年譜類に記載されていないものや、記載されていても不正確なものもあるので、随時指摘することとする。

2 『あるびよん』創刊号から第七号まで

『あるびよん』に掲載されている吉田健一の評論などを順次見てゆこう。まず創刊号の五ページは書籍広告欄になっているが、ここに吉田健一の雄鶏社刊『英国の文学』の広告が掲載されている。宣伝文によれば、「チヨースーより現代に至る英国文学史上の著名作家とその作品について、英国文学に造詣深き著者が文芸評論的に説いた労作……。」とある。吉田健一は昭和一〇年に刊行したポーの『覚書』の翻訳を始めとして、それまでにヴァレリーの翻訳書なども出版していたが、自著としては『英国の文学』が最初の本であった。したがって、『あるびよん』に彼がさまざまな記事を発表しているこの時期は、彼の文学活動が本格化した時期でもあった。吉田健一は『あるびよん』に長短さまざまな文章を発表しているが、それらの中で後に単行本に所収されたものもある。彼にとつて『あるびよん』は、作品発表の舞台の一つとなっていたのである。

『あるびよん』創刊号に彼が書いたのは、「英国の近代文学」という評論である。二三ページから三二ページまで、二段組で一〇ページにわたる。最後に「付記」として、「これは昨年末に

脱稿した、『英国の文学』と題する小著の最終章に相当するものである。」と書かれている。三二ページの左隅には思索社の広告が出ており、吉田健一訳のジョンソン著『シェイクスピア論』が筆頭に掲げられている。なお、この評論「英国の近代文学」は、後に大幅に書き直されて垂水書房版『吉田健一著作集』の第一巻（昭和三八年一月刊）所収の『英国の文学』の第一〇章「その後」となった。

初出と改稿の違いの一例として、それぞれの冒頭段落を次に示そう。この部分に関して言えば、初出と比べて改稿では、英国の文学の流れが一層明確な見取り図として示されている。

英国の近代文学は、第一次世界大戦が終つた一九一八年から始るとするよりもやはり英国の文学が辿つて来た、独自の発達の経路を考慮に入れて、十九世紀末より二十世紀に移行する期間に生じて勢を得た、文学上の傾向と見る方が正確である。何故なら、二十世紀の初頭から、第二次世界大戦が起つた一九三九年までの期間に、英国の文学の主流をなしてゐた人々の大部分は、十九世紀末に既に仕事を始めてゐたやうである。これに対して、第一次世界大戦が終結した後、更に新しい文学の動きが起つて一種の混乱状態を生じたことも、否定することは出来ない。しかし今日この、一九二〇年代の一時期を回顧するならば、問題は、

この時に現れた二、三の実際に価値ある新人の仕事が、英国の文学の伝統の上で如何なる形を取るか、といふことに帰着するやうに思はれる。然もこの寄与による英国の文学の更新が、英国の文学の将来を決定することも確実である。

『あるびよん』 創刊号所収「英国の近代文学」

島内裕子

英国の近代文学に就ては英国の文学そのものと同じ規模で、別に語らなければならないことは既に述べた。併しながら、凡ての時代といふものがさうである通り、近代といふ一つの時代もその時代の全般を蔽ふものではなくて、もっぱら十九世紀の後半から第二次世界大戦の終結までを近代と見做すならば、英国の近代文学もそれよりはもつと直接に英国の文学の伝統に即して発展した十九世紀の文学、及び二十世紀の文学と呼んでいいものから生じ、又これに育てられて行つたので、ここでは英国の文学に就て語り終るのに当り、その二十世紀の文学、或は二十世紀前半の文学であつて必ずしも近代文学ではないものに触れて置きたい。

『英国の文学』所収「その後」

『あるびよん』 第二号（昭和二四年一〇月）では、吉田健一は座談会「イギリスの生活を語る」に出席して、活発に発言している。この座談会は河盛好藏の司会により、小池厚之助（山

一証券社長、あるびよん・くらぶ理事）と松方三郎（共同通信社編集局長、あるびよん・くらぶ常任理事）と吉田健一が、彼らのイギリス留学の体験を語るものである。この座談会の様子は、『著作集』にも『集成』にも収録されていないので、内容を簡単に紹介しておこう。三八ページから五二ページまで、見出しは以下の通りである。「十年前」。ここには、彼ら三人がいづごろイギリスに行つていたかという話題から始まり、最後にイギリスから帰国して、ほぼ十年以上たつてゐることが書かれている。次は「印象にのこる事件」として、主に松方が一九二六年のゼネ・ストのことを語つてゐる。その後は、各自の体験というよりも、それに基づいた英国論・文化論になり、「壁のある社会」「劣等感のない国民」「根を下したビジネスぶり」「住みよいロンドンの町」「定評あるイギリス料理」「『偽善的』生活の複雑」「没落しないイギリス貴族」「イギリス人の偉さ」「イギリスのジャーナリスト」「読まれない『イギリス文学』」「男性的文化とイギリス婦人」という見出しが挙がつてゐる。

これらの中で吉田健一の発言として注目されるのは、イギリスの文学について、「大人ということだと思ひ出したのですがイギリス文学がはやらないということは、非常に大人の文学だということと言えるのじゃないか。思想的にどうのこうのということが取上げられないから、やはり摺みどころがないということになる。イギリスの大人を満足させなければならぬのだから、

大人の小説になつてしまふのですよ。」と述べていることである。この発言は、後述する第一五号の鼎談にも繋がっている。

第三号（昭和二五年一月）には、口絵写真の説明「戦後五年——英国の今日——」と評論「不思議な国のアリス」、および「編集後記」を書いている。この「不思議な国のアリス」は、後年どの単行本にも収められなかったが、初出時に若干見られた誤植が訂正されて、『著作集』補巻一に収録されている。

第四号（昭和二五年二月）には、口絵写真の説明「湖畔の詩人ワーツワス」（目次では「ワーツワスのふるさと」）・「ロオズ奨学金」とG・S・フレイザ「現代におけるワーツワスの意義」の翻訳を載せている。『著作集』年譜には「湖畔の詩人ワーツワス」の説明文のことが欠落している。

第五号（昭和二六年二月）には、口絵写真説明「子供の着物」と評論「ウインザア公——人間への突進——」（目次では「ウインザア公」とG・S・フレイザ「ロンドンの若い文士連」の翻訳の三篇を掲載している。

第六号（昭和二六年四月）では、座談会「思い出の学生時代（一）」に出席している。他の出席者は、福原麟太郎・高津春繁・池田潔・志村精一である。なお、『著作集』と『集成』の年譜はともに、本号のG・S・フレイザ「私の学生時代」を吉田健一の翻訳として記載しているが、彼の翻訳ということは明記されていない。ただし、第四号と第五号のフレイザの翻訳を吉

田健一が行なっているのです、おそらくこれも彼の翻訳と考えてさしつかえなかるうが、第四・五号の場合は、文末に「吉田健一訳」と明記されているのに対して、ここではそのような記述は見られない。

第七号（昭和二六年六月）には、第六号の座談会の続きと、ごく短い「くらぶ・るうむ」というコラムだけである。吉田健一は、創刊号以来本号まで毎回執筆してきたが、これ以後は第八号・第九号のように何も執筆していない号もある。なお、『集成』年譜の昭和二四年五月の項に、「第7号（昭和26年4月）までは『編集委員』として吉田健一の名が掲げられている。」とあるが、第八号でも「後記」末尾に付されている「編集委員」に吉田の名前があるので、年譜の記述はやや不正確である。

3 第八号から第二三号まで

『あるびよん』創刊号から第七号までは、毎号評論やエッセイや座談会など何らかの形で関わっていた吉田健一であるが、第八号以下は、何も書かない号も出てくる。第八号（昭和二六年九月）・第九号（昭和二六年十一月）には、彼の寄稿は見られない。第一〇号（昭和二七年一月）もごく短いアンケートへの答えが掲載されているだけである。このアンケートは通巻一〇号を記念して行なわれたもので、「イギリスのよいところわるいところ」という題である。「葉書回答・到着順」とあり、吉田健

一の回答は四四名中五番目で、次のような文章である。

いいところも悪いところも、イギリス人が世界有数の個性が強い、粘り強い国民だといふことに帰すると思ひます。その支配下にはどんなことがあつても置かれたくないが、なるべくその国の人間を多く友達に持つてみたいやうな国がイギリスです。

第一一号(昭和二十七年三月)も短いコラム「裁かれたロレンス」を書いていただけであるが、次の第一二号(昭和二十七年五月)には、久しぶりに評論「シェイクスピア『嵐』について」が掲載されている。この評論は、池田書店から『シェイクスピア』として刊行(昭和二十七年六月)された著書の最終章に「嵐」と改題されて収められている。『あるびよん』に掲載されたものと、この単行本を比べると、句読点や漢字の表記や表現にわずかの異同は見られるが、『あるびよん』創刊号に載った「英国の近代文学」が、単行本所収にあたって大幅に改稿されたのとは違つて、内容としては同じと見做せる。なお、『シェイクスピア』は、『あるびよん』第三号(昭和二十七年七月)の「あるびよん・くらぶ推薦図書」に挙げられており、この推薦文の筆者は不明であるが、最後は「これは専門学者の書齋の研究でもなく、さればとて雑文的批評家の放言でもない。実証と詩が、批評と情

熱が、美しく融け合つたひとつの成果にほかならぬ。われわれがここに本書を推す所以は、実にこのような評価と共感によるものなのである。」と締め括られている。この第三号には吉田健一自身の寄稿はない。

第一四号(昭和二十七年九月)にも短いエッセイ「旅への誘ひ」を寄稿しているだけだが、第一五号(昭和二十七年十一月)には、鼎談「イギリスの文学について」に出席している。この鼎談は、他に阿部知二と中野好夫が出席し、「大人の文学」「英文学と青春の書」「現実に結びつく英文学」「現代イギリス文学の傾向」「人間性への興味」という見出しが付いている。鼎談末尾には、「昭和二十七年七月一日、NHK第二放送」とあるので、年譜類では触れられていないが、ラジオ放送を活字化したものであるろうか。この鼎談で中心になつて二〇回余り発言しているのは中野好夫であり、吉田と阿部はそれぞれ一〇回ほどである。この中で、中野好夫が「吉田君はフランスとドイツと英語もやるのだから、フランス文学とイギリス文学と両方やつてみて、どういうところに違いを感じるか、感じないか……」と促すと、「これはやはり片方が大人の文学で、片方は青年の文学という人だから、生活の実感というものを文学で求めると思ひます。フランスでは、それがフランスの生活かも知れませんが、思想が先に来るのじゃないでしょうか。」と述べて、さらに続けて食

物の描写を例に挙げている。

この鼎談で注目されるのは、イギリスの作家イシャウッドのことが出てくることである。吉田健一は、昭和二七年三月に文芸春秋新社からイシャウッドの『山師』を翻訳し、中野好夫も同じく文芸春秋新社から昭和二七年九月にイシャウッドの『救いなき人々』を翻訳している。中野好夫は昭和一五年四月号の『英語研究』の「現代英米作家鑑賞」ですでに、イシャウッドの『Goodbye to Berlin』（翻訳名『救いなき人々』）についての紹介記事を書いている。『あるびよん』の最終号にあたる第四八号にも、福田陸太郎がエッセイ「ディテイルの描写」の中で、「私はイシャウッドの作品などを読みなおしてみても、その描写のしかたに非常に興味を覚えている。」と書いている。当時よく読まれた文学者だったのであろう。

第一六号（昭和二八年一月）には寄稿していないが、第一七号（昭和二八年三月）の「ロンドン案内 ★行った気分になる★」と銘打った特集には、吉田健一も「公園めぐり」というエッセイを寄せている。これは『集成』の年譜では「未確認」となっている。同年譜では他に『あるびよん』第三七号も「未確認」になっているが、この二つの号はどちらも国会図書館収蔵の『あるびよん』の欠号にあたる。エッセイ「公園めぐり」は後に、「ロンドンの公園めぐり」と改題されて、『英語上達法』（垂水書房・昭和三二年七月）に収録されている。『著作集』で

は、第九卷所収の『英語と英国と英国人』に収められている。ただし、『著作集』第九卷の解題で、「ロンドンの公園めぐり」を「初出未詳」としているのは、この巻の刊行時点（昭和四四年六月）で未詳だったということであろう。『著作集』補巻二（昭和五六年七月）の年譜では、この『あるびよん』第一七号のエッセイ「公園めぐり」が「ロンドンの公園めぐり」と改題されていることが示されている。初出と単行本でほとんど異同はないが、ごくわずかに表現や表記が変わっている箇所もある。たとえば、冒頭の一文は『あるびよん』では次のように書かれている。

ロンドンとは東京と同様に、もともとそれほど大きくなかつた都会が発展して行く途上で、前は郊外だつた緑地帯を吸収するのが早かつたために、その緑地帯の一部がそのまま残されて公園になつたと言へるので、大都会としては東京とともに、最もこの種類の施設に恵まれてゐる。

この部分が『著作集』に収められているものではなく、「それほど」のために「二箇所が漢字で「それ程」「為に」となり、「大都会としては東京とともに」が「大都会としては最近までの東京とともに」に表現が変更されている。

ところで、このエッセイに関して『著作集』第九卷の解題で、

公園の広さの坪換算で「あきらかに誤植とみなされるものが、これまでの全刊本に踏襲されてきた。」として、「そこで今回は、それら公園の広さはすべて、換算し直した数字にあえて訂正した。」とあるが、このような場合、やはりむしろ原文のままとして、補注などを付して訂正すべきではないだろうか。

第一八号（昭和二八年五月）および、第一九号（昭和二八年七月）には、吉田健一は書いていないが、第一九号の投書欄には彼が翻訳した『怒りの海』のことが出ているので、紹介したい。これは大高節子という女性の「生きる勇氣」という投書で、次のように書かれている。

先日、吉田さんのお訳しになつたモンサラッドの『怒りの海』を読みました^{（中略）}久振りの良い本を読んで感激まだ去りやらぬところです。（中略）

今、私は、生きるために一番必要なものは「勇氣」だと思つてゐます。日本人も随分勇敢だつたと、過去には言はれたこともありましたが、その勇氣とは又別な、それよりもつと深いよく生きることを愛する人のみ持つ勇氣とでも言つたらよいでせうか、そのやうな勇氣のあり方を『怒りの海』は読み取らせてくれました。物事を真正面から見て正しく判断する勇氣、それさへあれば、ます／＼多事多難のこれからの世の中を恐れずに生きて行けるのではないで

せうか。

『怒りの海』の本質をよく捉えたすぐれた感想である。吉田健一がニコラス・モンサラット著『怒りの海』の翻訳上下二冊を新潮社から刊行したのは、昭和二八年一月であるから、半年ほどでこのような反響があつたわけである。なお、雑誌『あるびよん』の裏表紙には毎号英国映画協会提供の映画の宣伝が出ているのだが、第二一号（昭和二八年一月）には、映画『怒りの海』の宣伝が掲載されている。それによれば、この映画は「エンジンバラ映画祭ゴールドデン・ロウレル賞獲得作品」で、「死線を超えた海の男達の友情と闘魂の渦潮!」「世界的ベストセラ―、ニコラス・モンサラットの原作」「性格名優 ジャック・ホウキンス主演」「英国の惑星 チャールズ・フレンド監督」とある。

第二〇号（昭和二八年九月）には寄稿していないが、第二一号（昭和二八年一月）には、鼎談「イギリスの旅に拾う」がある。小川芳男と福原麟太郎と吉田健一の座談会である。見出しは「きれいになつた町」「騒音のないイギリスの町」「病院から水力電気まで」「芝居見物」「会つた人々」「英国はヨーロッパの支那」で、小川が司会役になつている。吉田健一は昭和二八年八月に池島信平・河上徹太郎・福原麟太郎とともに約一カ月間イギリスを訪問している。この時の体験は、第二六・三〇号

などのエッセイに結実している。

第二二号（昭和二九年一月）には、「T・S・エリオット」という評論を発表している。これは後に、『詩と近代』（小澤書店刊・昭和五〇年七月）に収録されている。この評論は第二二号のみ掲載されたものであるが、講談社文芸文庫に収められている吉田健一の作品末尾に付けられている藤本寿彦編の年譜には、この部分に誤りがある。同年譜の一九五四年一月の項に、「同月から三月まで『T・S・エリオット』を『あるびよん』に連載。」とあるが、これは今述べたように連載ではなく、一回で完結しているのである。この記述は、おそらく筑摩書房版『現代日本文学大系』66所収の郡司勝義編の「吉田健一年譜」を踏襲しているのだろう。その昭和二九年の項に「一月から三月まで『T・S・エリオット』を『あるびよん』に連載。」とあるからである。

この誤りは幸い『著作集』と『集成』の年譜には踏襲されていないが、『著作集』ではこの第二二号のG・S・フレイザ「日英文化人の交流」の翻訳を吉田健一としている。この翻訳の末尾に「一・四、NHK第一放送『海外の話題』」とあるが、翻訳者の名前は明記されていない。したがって、第六号の翻訳とともに、ここでも翻訳者を吉田健一に特定するのはいかながなものであろうか。

第二三号（昭和二九年三月）には、「イギリス文学案内」を掲

載している。これは「チヨオサア」「チヨオサア以後からエリザベス時代までの中間期」「エリザベス時代」「シェイクスピア」「十八世紀の文学」「十九世紀」「二十世紀」という見出しからなり、三段組六ページの評論である。末尾に「付記。これは前に一度、或る特殊な雑誌に発表したものであるが、同じことを書き改めるの気がひけるので、そのままの形で出すことにする。」という但書きが付いている。「或る特殊な雑誌に発表したもの」というのが何を指すのか、年譜類を見ても、これに該当する評論は今のところ不明である。この評論については、『集成』年譜には記載されている（ここでは題名が「英文学案内」という目次の題になっている）が、『著作集』年譜に記載されていない。

4 第二四号から第四八号まで

第二四号（昭和二九年五月）は『あるびよん』の創刊五周年にあたる。この号に吉田健一は短いエッセイ「よく続いたもの」を寄稿している。全文は次の通りである。

「あるびよん」が五周年記念号を出すことになつたと聞いて驚きました。よく続いたものです。そのお手伝ひは初めのうちこそやつてゐましたが、今では雑誌が来るごとに借金取りに攻め立てられる思ひで、全くかういふ成果を得

たのは長谷川さんを始め編集部の方々の努力あつてのことです。それに感謝してゐると書くのも、空々しい気がします。と同時に又、もう大丈夫だとも、実は思つてゐるので、嬉しいことです。

この短文には、彼の率直な感慨があらわれている。『あるびよん』の創刊号と第二号には、表紙に「編集」として林達夫と福田恆存とともに吉田健一の名前も挙がつており、第七号までは毎回執筆していたわけであるから、彼にとつてこの雑誌の存在は大きかつたはずである。しかし、その後昭和二十六年から二十九年にかけての吉田健一の文学活動は、単行本の翻訳が多くなり、『あるびよん』への寄稿は次第に減つていく。この時期に刊行した翻訳書は、講談社文芸文庫の著書目録によれば、昭和二十六年にはデフォオ『ロビンソン漂流記』（新潮文庫）、チェスタアトン『木曜の男』（早川書房）、ワイルド『芸術論』（要書房）、ギップス『お前の敵』（小山書店）、コラン『野蛮な遊び』上下（筑摩書房）を出版している。昭和二十七年には、デュ・モオリ

ア『真実の山』（ダヴィッド社）、ルネ・ラルウ『英文学史』（白水社）、イシャウッド『山師』（文芸春秋新社）、フランシス・ウイリアムス『リチャードソン物語』（高野良二と共訳、新潮社）、エリザベス・ボウエン『日ざかり』（新潮社）を刊行している。昭和二十八年には、モンサラット『怒りの海』上下（新潮社）、ブ

ドウ・スワニイゼ『叔父スタアリン』（ダヴィッド社）、デュ・モオリア『林檎の木』（ダヴィッド社）、ヘンリー・ミリア『性の世界』（新潮社）、ヘンリー・ミリア『暗い春』（人文書院）、ブルウス・マアシャル『抵抗の戦場』（日本出版協同株式会社）、トインビー『世界と西欧』（新潮社）を翻訳している。昭和二十九年には、T・S・エリオット『荒地・評論』（新潮社）、T・S・エリオット『カクテル・パーティ』（福田恆存と共訳、新潮社）、クロオデル、ジイド往復書簡『愛と信仰について』（河上徹太郎と共訳、ダヴィッド社）、ステイヴンソン『若い人々のために』（池田書店）がある。このようにこの時期の翻訳は非常に多く、翻訳家としての活動が中心になっていたと言えよう。

第二五号（昭和二十九年七月）には何も寄稿していないが、第二六号（昭和二十九年九月）には、「イギリスのクラブ」が掲載されている。このエッセイは、前年のイギリス訪問の時の体験を織り混ぜて書いたもので、後に『英語上達法』（垂水書房・昭和二十九年七月）に収録されている。第二七号（昭和二十九年一月）には、「英国映画ロミオとジュリエットを見て」というエッセイを寄稿している。これは、小特集のような形で、吉田健一を含めて八名が感想を寄せている。掲載順に氏名を示せば、飯島小平（早大文学部教授）・中橋一夫（東大教授英文学者）・崎山正毅（NHK国際局長・英文学者）・清水光（映画芸術）主幹・京都工芸繊維大教授）・吉田健一（英文学者）・内村直也（劇作

家）・北村喜八（演出・劇作家）・西村孝次（明大教授）の八名である。それぞれの感想の末尾にかっこで示した現職が付されている。

この後は第二八号（昭和三〇年一月）と第二九号（昭和三〇年三月）には書いていないが、第三〇号（昭和三〇年五月）には、かなり長い作品が掲載されている。これは「ロッホ・ネスの怪物」という題で、三段組で一〇ページにわたる。昭和二八年八月のスコットランドでの体験談をもとにして書かれており、情景描写や心理描写が詳しく、短篇小説と言ってもよい作品である。これは後に、『随筆 酒に呑まれた頭』（新潮社・昭和三〇年八月）、および、『酒宴』（東京創元社・昭和三二年一月）に収録された。

第三一号（昭和三〇年七月）・第三二号（昭和三〇年九月）には書いていないが、第三三号（昭和三〇年十一月）には、「二頁インタヴュー」の項で吉田健一が取り上げられている。ノーネクタイのワイシャツの袖を肘の上まで折り曲げ、左手に短い吸いさしの煙草を持って腕組みしている上半身の写真が掲げられている。インタヴューの内容は、ロンドンの酒と料理のことから始まり、最後にシェイクスピアの近代性について語っている。冒頭は、「吉田さんの著書を繙くと、どこかの隅に必ず、心楽しい酒談義を発見する。」と書かれ、「更に最近のヒット随筆集として『酒に呑まれた頭』がある。」とも書かれている。最後は、

「名門の家に生まれながら、生粋の庶民性を身につけているあたり、これが吉田さんの人気の根源であろう。今年四十三歳。」と結ばれている。これらの書き方は、当時の吉田健一が、読んで楽しい随筆家として理解されていたことを示している。

この後、第三四号（昭和三一年一月）・第三五号（昭和三一年三月）・第三六号（昭和三一年五月）の各号には寄稿していない。第三七号（昭和三二年七月）には、A・C・スウィンバーンの詩「アタランタに対する合唱」の翻訳を掲載している。この詩はそれに先立って、河出書房版『世界詩人全集』第四卷（昭和二九年十二月）に収録されている。ただしここでは、「劇詩『カリドンに行つたアタランタ』より」という題の下に、「合唱」「別れの歌」の二つの訳詩が掲載されている。『あるびよん』に掲載されたものは「合唱」と比べて、句読点や表記・表現などに若干の変更が見られる。さらにその後、翻訳詩をまとめた『葡萄酒の色』（垂水書房・昭和四〇年一月、小澤書店・昭和五三年八月）にも収録されている。なお、『著作集』も『集成』も年譜で、この項目の表記が「スウィンバーン」と書かれているが、『あるびよん』では目次・本文ともに「スウィンバーン」である。

第三八号（昭和三一年十一月）には何も書いていない。第三九号（昭和三二年一月）にも寄稿はない。ただし、この号の口絵写真の次の広告ページには吉田茂・吉田健一の『大磯清談』（文芸春秋新社）の宣伝が出ており、『週刊東京』に連載好評

を博した父子対談」とあり、同ページ下段の「最近のイギリス関係新刊書」の筆頭に吉田健一の『シェイクスピア』（垂水書房）が記載されている。また、七八ページから七九ページの「あるびよん・くらぶ総会アルバム」の写真には吉田健一の姿も見える。第四〇号（昭和三二年三月）にも寄稿していないが、最終ページの消息欄に「吉田健一氏『シェイクスピア』で読売文学賞を獲得した。」という短い記事が出ている。

第四一号（昭和三二年五月）には短い文章であるが久しぶりに寄稿が見える。「神西さん」というエッセイである。「あるびよん」の創刊にも関わる思い出が書かれているので全文を引用したい。

島内裕子

神西清氏が三月に亡くなられた。「あるびよん」並びにあるびよん・くらぶは神西さんの発案で始められたもので、終戦後の混乱の中で秩序を回復する何かの緒になるものを神西さんは英国の文化に求められ、多数の賛同者を得て、先ず「あるびよん」が創刊され、次いであるびよん・くらぶが結成された。

神西さんは英国というものに絶えず関心を持つておられて、悲哀の英国女王たるジューン・グレーに関する優れた研究もある。

最後に公的な会合に顔を出されたのも、昨年のあるびよ

ん総会ではなかつたかと思う。古垣鉄郎氏の会長就任に賛意を表して後、直ぐに帰られた。

また、この第四一号の口絵写真の次のページには、「シェイクスピア祭」の催しが書かれているが、その中で、四月二〇日（土）午後一時三〇分から東京大学で行なわれる講演に吉田健一の名前が見える。題名は「シェイクスピアについて」である。年譜類にもこの講演のことは記載されていないので、実際に行なわれたかどうかは、この予告広告だけではわからないが、吉田健一に関する資料として挙げておきたい。

第四二号（昭和三二年八月）には寄稿は見られないが、第四三号（昭和三四年一月）には「祝復刊」という短い文章が掲載されている。『集成』の年譜では「未確認」となっている。国会図書館所蔵の『あるびよん』は創刊号から第四二号までであり、第四三号は現在あまり残っていないと思われるので、次に全文を掲げよう。

「あるびよん」が再刊される由、大慶に存じます。妙なもので、あるびよん・くらぶを始めた時は、こんなことになると思っていました。あるびよんの各支部は発展して、くらぶを作った趣旨が、実際に根拠があるものであることを解らせてくれたのみならず、雑誌が休刊になっ

ている間も、方々の支部は健在なのに驚かされました。ということとは、「あるびよん」の読者諸氏も熱を失わずにこの雑誌の再刊を持って（引用者注、原文のママ。「待って」の誤植か）おられたのだろうと思います。一つの雑誌にとつて、これは大したことです。これからの雑誌の発展を祈ります。

第四二号以来、約一年半にわたって休刊していた『あるびよん』が再刊されたことを喜ぶ文章である。成田成寿による編集後記には、「財政的困難のため」に休刊していたことや、「あるびよん・くらぶには専門の編集員はいない。みんな素人で、また忙しい仕事の片手間にやることなのである。そこが、あるびよん・くらぶらしいところであるけれども、この仕事を推進継続していくことには、会員諸氏の物心両面の後援に待つところが大きい。」と書かれており、この雑誌継続の困難さが語られている。

第四四号（昭和三四年三月）にも「あるびよんの連載」という短い文章が掲載されている。全文は以下の通りである。

本紙連載の中村英勝氏の「英国開化小史」は地味な労作であるという点で、まだ余り一般の注意を惹いていないようですが、こういう纏め方をしたのは、今日の英国でも

余りその類を見なくて、完成の暁には、英国に関心がある凡てのひとびとにとって必読の書となることを疑いませぬ。中村氏の御健筆を祈ります。

第四五号（昭和三四年六月）には、二段組四ページにわたるエッセイ「ロンドンの公園と郊外」が掲載されている。表現は新仮名遣いであるが、後に『英語と英国と英国人と』（垂水書房・昭和三五年八月）に収録された時は、旧仮名遣いになっており、漢字のあて方も多くなっている。このエッセイは『あるびよん』第一七号の「ロンドンの公園めぐり」と一対をなすものである。

第四六号（昭和三四年八月）、および第四七号（昭和三四年一月）には寄稿していないが、最終号となった第四八号（昭和三五年八月）には「松方さん」という短いエッセイが掲載されている。このエッセイのことは、最も詳細な『著作集』と『集成』の年譜のどちらにも記載されていない。全文は次の通りである。

松方理事長が御健康を回復なさったのは何よりです。どんな組織でも、これは雑誌も含めて、誰か中心人物が一人いて始めて健全に活動することが出来るので、「あるびよんくらぶ」ととつては何と云つても、松方さんがいて下さることが必要です。これから一層の発展を期待するなど云うことは申したくありません。発展と云う風なことは仕事

を続けているうちに向うからやって来るもので、「あるびよん」はこれからも「あるびよん」であることを期待します。

この文章からもわかるように、『あるびよん』が本号で最終号となるとは、吉田健一も思っていなかっただろうが、現実には、この号以後の『あるびよん』の存在は、知られていない。昭和二年六月以来、通巻四八号を数えた『あるびよん』も終刊したのである。吉田健一はこの雑誌の創刊時においては、積極的に編集に携わっていたと考えられるし、評論や翻訳やエッセイなどさまざまな文章を寄せている。ただし、現在では雑誌『あるびよん』の存在も忘れ去られようとしており、全巻が所蔵されている図書館などの機関も少ないようである。この雑誌の全巻を通覧し、従来の年譜類に記載されている事項を逐一確認することができたことの意義は、決して小さくはないと思う。その結果、本稿において、いくつかの記述の誤りを訂正することができ、さらに今まで知られていない吉田健一の文学的業績も付け加えることができたのである。

三 その他の文学活動

1 「ポール頌」について

吉田健一は、昭和三四年九月に東京創元社から刊行された『世

界推理小説全集』59のエリオット・ポール著・小津次郎訳『ルールの怪事件』の月報に、「ポール頌」という短いエッセイを寄せている。この全集の監修として、江戸川乱歩・植草甚一・吉田健一・大岡昇平の名前が挙げられている。吉田健一がエッセイなどでエリオット・ポールに言及することは多く、特に『書架記』（中央公論社・昭和四八年八月）には「エリオット・ポールの探偵小説」というエッセイがあり、最晩年の著書『思ひ出すままだ』（集英社・昭和五二年一月）でも、その冒頭がエリオット・ポールのことにあてられている。なお、『書架記』と『思ひ出すままだ』におけるエリオット・ポールへの言及については、拙稿「近代文学におけるヴァトー——堀口大学から吉田健一まで——」（『放送大学研究年報』第十三号・平成七年）で、多少触れている。

月報に書かれた「ポール頌」は、これらの単行本所収のエッセイと比べて、早い時期に書かれたものであり、『著作集』や『集成』にも掲載されていないので、ここで全文を引用しておきたい。

今度出るエリオット・ポールで、このアメリカの推理小説家が日本で最初に訳されたことになる。推理小説にはその専門の作者や読者があるのださうで、さういふ専門家は何に付けても厄介な存在であるが、ポールのことともどう思

ふか解らない。こつちの個人的な好みを言ふと推理小説でも、一般の小説並に面白く読めて、登場人物が恋愛をしたり、御馳走を食べたり、どうにも滑稽な事件が起きたりするのがよくて、ポールのやうに序でに、パリを語り、嘘に決っている古代エジプトの歴史を誠しやかに述べ立ててくれれば、推理の跡が楕円形か、拋物線を描くかなどといふことは問題ではない。現に、この小説でも犯人は罰せられずに芽出たく結婚するし犯人ではないことが解つてゐる人間が重刑に処されてゐる。専門家に言はせれば、どういふことになるか知らないが、一流の文学である。

中島河太郎による本書の解説の冒頭に、「推理小説家としてエリオット・ポールの名を、はじめて紹介されたのは吉田健一氏であつた。」とあり、吉田健一のポール論の引用も三箇所ほど見られる。この引用はおそらく、昭和二九年三月の雑誌『新潮』に発表された「エリオット・ポールの探偵小説」によると思われるが、このエッセイは未見である。

2 初出未詳の典故、および著書の発行年について

『著作集』や『集成』の年譜で初出が未詳となつてゐるものうち、典故がわかつたものが二つあるので紹介したい。一つは、『著作集』第二五巻所収の『詩と近代』に収められてゐる「小

林秀雄——図書目録」の典故である。これは、『著作集』の解題で初出未詳とされているが、昭和三〇年一二月に刊行された新潮社版『小林秀雄全集』第六巻の月報に書かれた文章である。なお、『詩と近代』は昭和五〇年七月に小澤書店から刊行された評論集である。

もう一つは、『著作集』第一巻所収の『書き捨てた言葉』に収められてゐる「親に孝に」の典故である。これも初出未詳とされているが、昭和三三年一月に講談社から創刊された雑誌『日本』の創刊号に掲載されたものである。

次に『集成』の「吉田健一書誌」で発行の日付が未確認となつてゐるものの中に、確認できたものが二冊あるので、ここに示しておきたい。一冊は、垂水書房版『吉田健一著作集』の第十二巻『英国の文学の横道』で、昭和四二年一月三〇日である。もう一冊は、小山書店刊行の『ロレンス選集』第八巻の『息子と恋人』(下)で、これは昭和二五年一〇月三〇日刊行である。

3 知られざる文学業績

昭和四七年七月に刊行されている河出書房新社の『日本の古典』21の『新井白石・本居宣長』の中で、「秘本玉くしげ」と「玉勝間」の現代語訳を吉田健一が担当していることは、あまり知られてゐないようである。このシリーズは、「カラー版 現代語訳」と銘打つた全二五巻からなり、久松潜一・川端康成・円地

文子・山本健吉・中村真一郎の五名が責任編集している。『古事記』から始まり『江戸小説集II』まで、訳者は専門の国文学者よりもむしろ、小説家や評論家が多い。この第二一巻は杉浦明平訳の「折たく柴の記」、桑原武夫訳の「藩翰譜」、河上徹太郎訳の「排蘆小船」、吉田健一訳の「秘本玉くしげ」、吉田健一訳の「玉勝間」、河上徹太郎訳の「宇比山踏」、野口武彦訳の「徂徠先生答問書」が収められている。

吉田健一がこのような日本の古典の現代語訳を行なっているのは意外でもあり、また、従来の年譜類にこの仕事のこととは記載されていないのも不審である。「秘本玉くしげ」は全訳である。「玉勝間」は抄訳であるが、その中で、有名な宣長の兼好法師批判も訳しているが、「また同じ法師が人は四十八にならないうちに死ぬの感じがいいと言っているのなども」(二六三ページ下段)は「四十八」でなく「四十」とあるべきところである。

吉田健一は、外国文学を翻訳した場合には、それらの著者やその作品に、他の評論やエッセイの中で触れることが多い。それに対して、本居宣長についてやこれらの作品への言及はほとんど見られないことから、この仕事は彼にとつて、あまり重要な位置付けを与えられていなかったのかもしれない。

おわりに

吉田健一の文学業績については、『著作集』や『集成』などに主要なものは収録されているが、ごく短いエッセイや座談会などはそれぞれの初出誌を読むほかはない。吉田健一はみずから作品を著書の形で次々にまとめており、それらの単行本に所収されていないものは、彼が自分の作品として重視していなかったことをあらわしているのであろう。しかし、それら未収録の文章もまぎれもなく吉田健一の作品であり、彼の文学世界を形成する一つ一つの礎石となっているはずである。また、彼はかなりの数の翻訳書を刊行しているが、それらには解説が付けられている場合が多く、それらの文章も吉田健一の文学観をよくあらわしている。

吉田健一の多彩な文学世界の研究のためには、それらの微小なエッセイなどもできる限り集めておく必要がある。なぜなら、それらは雑誌などに発表されたものがほとんどであり、その雑誌自体がここ五〇年間ほどのものでさえ、次第に散逸しつつあるからである。そのような観点から、本稿では、特に雑誌『あるびよん』を中心に、吉田健一の文学活動を辿ってみた。彼は昭和一〇年代には、同人誌『批評』を主な活動の舞台としていたが、戦後はまず、『雄鶏通信』に寄稿し、次いで『あるび

よん』と『ユース・コンパニオン』に寄稿している。今回は『雄鶏通信』と『ユース・コンパニオン』には触れられなかったが、これらの雑誌を舞台に、昭和二〇年代から三〇年代にかけての文学活動が展開されたのであった。

また、『フォーセット探検記』や『日本の古典』21のように、従来の年譜類に記載されていない翻訳書や現代語訳もあれば、初出未詳のものもまだ多い。今後も吉田健一の文学業績の全貌の解明に向けて、探索と考察を続けてゆきたい。

付記 本研究は、平成九年度放送大学特別研究費による研究成果の一部である。

(平成九年十一月五日受理)

The Addition of the Chronological Record of Ken'ichi Yoshida

Yuko SHIMAUCHI

ABSTRACT

This paper aims to survey the literary activities of Ken'ichi Yoshida. The author found out his unknown short essays and translation.

In the first place, point out his translation passed over in his chronological record. That translation is "Exploration Fawcett" by Brian Fawcett.

In the second place, look over his criticism of English literature and essays appeared in "The Albion". He wrote extensively for the magazine, but now this magazine is forgotten .

In the third place, introduce his short essay about Elliot Paul and his translation of Motoori-Norinaga's essay.